

砲撃のあとで

三木 卓



集英社

砲撃のあとで

一九七三年七月二十五日 一刷
一九七三年九月十五日 四刷

著者 三木 卓

発行者 陶山 巖

発行所 株式会社 集英社

東京都千代田区一ツ橋二一五—一〇

郵便番号 一〇一

電話 二六五—六一一一

振替 東京 一五六五三

印刷所 大日本印刷株式会社

検印廃止

定価は表紙カパーに表示してあります。
落丁・乱丁本はお取替えいたします。

砲撃のあとで

目次

朝……………7

夜……………12

帰館者……………34

鴉……………39

終局……………81

砲撃のあとで……………82

人……………99

腕……………108

曠野……………115

豎笛……………161

麵麴……………187

残留……………191

流れのほとり……………195

朝……………225

あとがき……………229

掲載誌一覧

装
幀

司
修

砲撃のあとで

朝

少年は疾走していた。木々の葉の間を縫って光は斜めに射し、放射する幕のなかで狂ったように霧が踊っていた。かれは息をはずませて木立から木立へと、微かな道を辿りながら前進した。白い池の面が見え、さわやかな八月の朝の風が、枯れた木の葉を対岸へむけてすべらせているのが見えた。檜のような脂臭い匂いがあたりにみなぎっていて、霧を浴びて銀色の破れた刺繡のようになった蜘蛛の巣が揺れていた。

ここを走ればこの公園を抜けられるはずだ、と少年は思っていた。そうすれば、その先にあるのがかれの小学校だ。早く、奴等がこないうちに行って、おれの兎を連れて来てしまおう。少年はアパートの屋上へ体操に行くふりをして、その足で公園に駆けこんだのだ。両親に見つかれば阻止されるにきまっている。だからこれしか手がないのだ。

築山を駆けのぼり公園を斜めにつづき。そう考えて実行したがこの公園の懐が意外に深いのに少年は驚いていた。灌木や繁みに触れると露がこぼれ、名も知らない鳥が幾羽も飛び立った。靴は濡れて真黒になり、胼には細かな葉や樹皮の屑が貼りついた。公園にあるものがみな、少年が先へ進むことを引きとめているように見えた。しかし、そうはいかない。おれはどうしたってあの兎を

連れて戻るのだ。少年はボブラの揺れている校庭を思い浮べた。夏休みに入ってしまったままこんなことになってもう二度と学校は始まらないかもしれない。ともあれ、幸いなことにおれは生きている。おれたちは生きられることになったのだ。

杉の密生したあたりを走りぬけたが、湿った苔にすべつてよろめき、前方にあった松の股にしがみついた。そこが森の終りだった。下方には玉砂利を敷いた敷地があり、その先には灌木による生垣がめぐらされていて、その外側は電車道だ。あたりはまだ乳色にかすんでいて、今ゆっくりと霧が晴れ上がっていくところだった。市街はそこにある。ねむっているのだろうか？ それともだれもないのだろうか？ 市街電車が一台、そこに放り出されたまま停止していた。ポールも下げられたままだ。

ざわめく人の声がし、少年は緊張した。それは、少年たち植民者の言葉ではない。この土地の民族の言葉だ。こんなに早く人々は公園に集まって何をしようというのだろうか？ 少年は首をのぼしてのぞきこんだ。すると中空を横切る太い縄があった。縄は斜めに走っていて、片方は高く片側は低くなっている。少年はその高い方が、銅像にしばりつけてあるのを見た。

銅像は前脚を高くあげていない、馬に乗っている老将軍だった。かれは鎧をしつかりと踏み、片手で手綱をとり、もう片方の手は抜刀した軍刀を頭上高く振り上げていた。植民者の統治者であるこの軍人の顔は昂然と上を向いていた。その細い首に縄はまきつけられていた。

どうするのだろうか？ 少年はそのまま姿勢を低くして成り行きを見守っていた。すると銅像の馬によじのぼる若い男があらわれ、苦勞しながら老将軍の背後にとりつき、片腕を將軍の胸に巻き

つけるよっにながら、もう片方の手で鋸を使い出した。鋸は將軍の細い首に喰いこみ、しばらくは鈍い音が聞えて来た。まきつけてある縄よりも深い、肩と水平になるあたりだった。少年は自分の首を守るように手をのどにあて、目をみはっていた。

すぐに若い男は手をあげて合図した。すると人々の声のざわめきが一段と高くなり、縄がびんと張った。どうなるだろう？ 若い男は何かを叫び、また縄に力がこめられた。銅像は昂然と空をむいていた。若い男はまた鋸で首を挽きはじめた。まだ足りなかったのだ。鋸は閃き、音は烈しくなった。また、縄がびんと張った。

少年は唾を飲みこんだ。今、銅像の將軍は空に向って獅子吼することをやめ、首をまげて何かを考えこんでいるように見えた。かれは首を不自然に曲げ、不審そうな様子をしめしていた。更に縄が引かれた。頭はさらに鋭い角度で地上へむかつてまがった。若い男が大声で叫び、將軍の頭に手をかけて押しはじめた。かれは軍帽に唾を吐きかけた。頭はもう、人間のものとしては考えられないようなおそろしい角度でまがった。そしてその途端、千切れて下へ墜ちた。

地響きがした。少年は眼を閉じ、そしてあけた。將軍は抜刀している手を高く振りあげていたが肩の上には何もなかった。頭のあったところには、遠い建築物の避雷針が見えた。歓声が上がリ、人々が落下した頭部に集まってくるのが見えた。少年はさらにのびあがって見た。人々は玉砂利を蹴たててかけ寄り將軍の頭部は軍帽を下にして逆立していた。人々は足先にひっかけて蹴った。頭は重いのでうまく蹴れず、最初の男は逆に足をとられてのしかかるようにして倒れた。

しかしすぐ人々はそれを教訓にして、二度とそのようなへまはしでかさなかった。かれらは足を

頭の下へ寄せるようにしてからゆっくりと蹴上げた。頭はゆっくりと回転しながら玉砂利のあいだを動いた。また別の足がでて来て同じことをした。また別の足が出、そのたびに歓声が上がった。將軍の獅子吼している顔はそのたびに地面に接吻し、軍帽も泥にまみれた。

これはもう出ていけない、と少年は思った。今、あの人々に見つかったら、自分も無疵では済まないかもしれない。少年は下界から湧き上がってくる憎悪を感じ、鳥肌が立つのをおぼえた。このほんの数日、少年は市街へ出ず家の中にもついていたが、それは激変の日々だったのだ。今、植民者の子弟である少年は危険なしで単独で市街を歩けるかどうかわからなかった。

人々に見つからないように姿勢を低くしたまま、もと来た方向へ戻りはじめた。朝は晴れ上がっていた。うなだれたまま歩いた。鬼は諦めよう。それよりも自分自身の命の方が問題だ。破局はやって来たのだ。

池の水は何事もなく光っていた。ほんの二週間前、少年はすぐそこにある偏平な石にすわって煮抜き玉子を食べ、真紅と白のんだんだらになっている浮きを見つめていたのだ。鰯は三寸ほどのものが一匹つれただけだったが、池の周囲はそぞろ歩きする人々と昼寝をしている労働者などでのどかな風景をつくり出していたのだ。

早く家へ帰ろう、と思った。裏出口の木戸を押して公園の外へ出た。赤煉瓦の塀が続いていた。少年は塀に沿って走った。影も長く伸びながら踊っていた。角をまがった。少年は息を呑み、すぐに身をひるがえすと壁に張りついた。

兵士が二人、そこに佇んでいた。かれらは円盤状の弾倉のついた自動小銃を首に吊し、身体の前

で支えていた。かれらは濃い鬚をのびほうだいにのびし、剃き出しの白い肌の腕にも赤い毛が生えていた。一人は眼鏡をかけていたが、もう一人はかけていなかった。少年は全身を耳にして気配を聞きとろうとした。かれらはだみ声でしきりに何かしゃべっていたが、その言葉は今まで聞いたこともないものだった。

もうやつて来たのだ。少年は壁にはりついたまま思った。国境線を破ってからまだ二週間しか経っていない。やつらは雪崩を打って侵入し、重、軽戦車群を前面に押したてて進んで来たのだ。その南下のスピードは異常なほど早かった。あの精鋭と呼ばれた国境防衛軍はいつたどこへ行つたのだろうか？ 少年はいぶかしく思っていたがとにかくもう、かれらは首都に姿を現わしていたのだ。

かれらは慎重に銃を構えていた。その様子には野戦を戦つて来た者のもつ緊張が漲っていた。二人は、それぞれ反対の方向にからだをひらいていた。やがて微かな爆音が聞え、路の彼方から迷彩をほどこした軍用トラックが姿を現わした。二人は手をあげ、トラックは止まった。荒々しい会話が車の内外でかわされた。

飛び乗った。トラックは薄青い煙を吐き出して走り出した。少年は呆然として見送った。トラックはたちまち消え、また人気のない道路と赤煉瓦の塀だけが少年の眼前に拡がっていた。

夜

「それがあなた、原子なんですよ。原子破壊ですよ」戦鬨帽をかぶった男がいった。向きあつて立っている鞆を持った男は頷いた。薄暗くて顔はよく見えなかった。「これは」戦鬨帽の男は声をひそめていった。「ひょっとするとひょっとしますな」二人は階段に足をかけたまま動かなかった。「そう。そうですか」鞆を持った男はしばらくうつむいておどろきをこらえているようだったが、やがて顔をあげるといった。「本当なら勿論そうでしょうな。理論は聞きかじったことがありますけれども」「そういうことなんだそうですね」戦鬨帽の男は頷いた。「わたしは何も知りやしませんかね。とにかく信じられないような数字をいってましたよ」鞆を持った男ははじめて笑いを浮べた。照れ臭そうな笑いだった。「情勢がこうなると今度はあっちの方が心配ですなあ。それじゃ」「じゃ」

停止していた映画フィルムがまた回転しはじめた時のように二人は不意に動き出し、一人は上へ、一人は下へと別れた。階段は日没直後の薄暮の光を、あかりとりの細長い窓から浴びていた。かなり暗かった。尿と黴の匂いがした。少年は四階から五階のあたりをのぼっている戦鬨帽の男の足音を聞いていた。曳きずるような響きは、上方に行くにしたがつて明るみの多く残っている階段

の空間にこだましていた。どこか投げやりな感じがした。やがて鉄の扉が悲鳴をあげて開き、閉じるガーンという音がした。その瞬間からまた静寂がもどってきた。

少年はしばらく佇んでいたが、やがてコンクリートの階段の手摺に抱きつくように跨って三階から二階へと滑り降りた。多少恐いが気分はよかった。本当は身体を逆に入れ換え、上体を起して正面をむいて尻で滑りたい。しかしそれは小学生にはまだ難しすぎる。屋上まであがって、一番下の階まですべてみようかと思ったが、何となく気がすまなかった。

いったい何のはなしだったのだろう？

少年は首をかしげた。けだるい植民地の夏休みの夕暮だった。淡い灰色の淀んだ光が次第に濃くなっていった。今の戦闘帽の男も鞆を持った男も、少年の父親が勤務している植民者たちのための新聞社の社員だということは少年も知っていた。かれらは片方が勤務が終り、片方がこれから勤務に就くという時に階段ですれちがったのだ。ポケットに手をつこんで中のラムネ玉をじゃらじゃらと鳴らし、また暫く立っていた。脇の下がじっとりと汗ばんでいるのを感じ、自分がすこし緊張していることに気づいた。少年は、二、三度跳びはねた。ラムネ玉がじゃらついた。自分の家の鉄扉の細い隙間から馬鈴薯と玉葱を煮る匂いが漂ってきた。階段に腰を下し、目をつぶって匂いを感じた。人参がはいっているかどうか、かきわけられるだろうか。だいになるのは鶏肉か、それとも豚肉か。おれの鼻は優秀なのだ。とくに腹がへれば、ますます研ぎすまされるのだ。

また登音がした。目をあけて逆光の黒い人影がのぼってくるのを見た。父親だった。かれは前かがみにかがんで、ズボンのポケットに手を入れ、何かを考えこむようにしながら階段を昇って来

た。少年は声をかけようとしてためらった。何となく父親が他人の陰気な老人のように思われたのだ。しかし、勿論そんなことがあるはずもなかった。「おかえりなさい」少年はいつものように声をかけた。父親は、「やあ只今」と言葉を返してはこなかった。かれは一瞬眉毛を吊り上げるようにして少年の方を見たが、すぐ陰気な眼付きにもどった。そして扉をあけて中に入った。

今日の大人たちはみんな変だ。少年は不吉な予感を抱きながら父親のはいつていった扉をながめていた。真夏の暑気が淀んでいるのに少年は肌寒く、畢丸が縮み上がっていくような気分が這いつてくるのを感じた。少年は荒々しいコンクリートの壁にとりつけてある電灯の紐を引いてあかりをともした。階段は影をともなつてそこに浮び上がって見えた。

少年は深く一呼吸すいこみ身体にはずみをつけると、一気に自分の家の扉に打ち当り、ころげこむようにして玄関に入った。靴を馬が蹴りとばすように脱ぎ捨て、荒々しく台所にとびこんだ。

「今日、何？ カレーでしょ。カレーだつて思っているんだけど」

母親は白いエプロンをしてガス台の前に立ち、父親とむかいあっていた。少年は野菜を煮ている大鍋の火が切つてあるのに気づいた。父親は先刻のままの姿勢で無造作に突つたつていた。二人は少年がはいって来ても一向に関心を示さず、ただお互いに顔を見合っているばかりだった。少年は用意した言葉をいってしまい、その次に何をいつたらいいのかわからなくなった。そして、そこに棒のように立ち、二人を見つめていた。

母親は蒼白になつて眼を大きくひらいていた。そしてしきりにエプロンに両手をこすりつけて、手についている汚れものをとろうとする仕草を続けていた。しかし少年が見たところでは、手はき